

市原市中潤ヶ広遺跡(2)

—主要地方道五井本納線住宅市街地基盤整備委託(潤井戸工区)埋蔵文化財調査報告書—

平成19年3月

千葉県土整備部

財団法人 千葉県教育振興財団

いち はら なか うる が ひろ

市原市中潤ヶ広遺跡(2)

—主要地方道五井本納線住宅市街地基盤整備委託(潤井戸工区)埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第579集として、千葉県県土整備部の主要地方道五井本納線住宅市街地基盤整備委託事業に伴って実施した市原市中潤ヶ広遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器集中地点や縄文時代の陥穴などが発見されました。旧石器時代では石器がまとまって出土しており、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による主要地方道五井本納線住宅市街地基盤整備委託（潤井戸工区）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、市原市潤井戸字八方見塚1773ほかに所在する中潤ヶ広遺跡（遺跡コード219-081）である。本書には平成15年度・17年度・18年度の発掘調査成果を収録している。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、主席研究員 関口達彦が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部千葉地域整備センター市原整備事務所、市原市教育委員会はかくの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 市原市発行 1：2,500 市原市基本図D 7 (IX-L E 87-1) を改変転載
第3図 国土地理院 1：25,000 蘇我 平成12年9月発行
国土地理院 1：25,000 海士有木 平成17年5月発行
- 8 本書で使用した周辺航空写真は、京葉測量株式会社が昭和47年に撮影したものである。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。座標系は、日本測地系に基づいている。
- 10 本書で使用した遺構番号は、遺構の種別に基づく略号を用いている。発掘調査時に付した遺構番号は、遺構番号横の（ ）内に記載した。
- 11 本書の遺構及び遺物の縮尺は、以下を基準とする。挿図中の用例は各図に示した。

旧石器時代ブロック	1/40	1/100	石器	2/3
土坑・ピット列・溝状遺構	1/60		土器・拓本	1/3

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第2章 旧石器時代	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本土層	9
第3節 石器群の分布と出土遺物	10
第3章 縄文時代以降	17
第1節 検出された遺構	17
第2節 グリッド出土遺物	17
第4章 まとめ	19
報告書抄録	19

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の地形	3	第6図 第2・第3ブロック遺物分布図	13
第2図 調査区及びグリッド配置図	4	第7図 第1～第3ブロック出土石器	14
第3図 周辺の遺跡	6	第8図 検出遺構	18
第4図 基本土層図	9	第9図 出土遺物	18
第5図 第1ブロック遺物分布図	11		

表目次

第1表 第1ブロック出土石器組成表	15	第3表 第1ブロック出土石器属性表	16
第2表 第2・第3ブロック出土石器組成表	15	第4表 第2・第3ブロック出土石器属性表	16

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真	図版4 検出遺構
図版2 調査状況	図版5 出土遺物
図版3 旧石器時代遺物出土状況	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

千葉県県土整備部は、交通量の増加に伴う混雑緩和と住宅市街地基盤整備事業に関連する道路改良事業のため、主要地方道五井本納線の拡幅工事を計画した。このため、千葉県県土整備部から事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無についての照会を受けた千葉県教育委員会は、当該区域内に古墳や包蔵地等の周知の遺跡が所在する旨の回答を行った。所在する遺跡の取扱いについて千葉県教育委員会と千葉県県土整備部が協議を重ねた結果、やむを得ず現状保存が困難な遺跡については記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が千葉県県土整備部から委託を受け、発掘調査を実施することとなった。中潤ヶ広遺跡は、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、当財団が平成13年度から断続的に発掘調査を実施している遺跡である。平成13年度・14年度に調査を行った第1・第2地点の調査成果は、平成16年度に『市原市中潤ヶ広遺跡(1)』として報告書を刊行している。今回は、平成15年度・17年度・18年度の3次にわたって調査を行った第3・第4地点の調査成果で、中潤ヶ広遺跡(2)として報告する。

発掘調査の終了後、平成17年度から整理作業が開始され、平成18年度をもって報告書刊行の運びとなつた。発掘調査及び整理作業の各年度の実施期間、組織及び作業内容は下記のとおりである。

発掘調査

平成15年度

期 間	平成15年12月1日から平成16年1月20日		
組 織	調査部長 斎木 勝 市原調査事務所長 鈴木定明 担当職員 上席研究員 伊藤智樹		
内 容	確認調査	上層243m ² /2,430m ²	下層89m ² /2,430m ² 本調査 上層0m ² 下層120m ²

平成17年度

期 間	平成18年1月17日から平成18年1月31日		
組 織	調査部長 矢戸三男 中央調査事務所長 谷 句 担当職員 主席研究員 土屋治雄		
内 容	確認調査	上層98m ² /560m ²	下層28m ² /560m ² 本調査 上層0m ² 下層0m ²

平成18年度

期 間	平成18年8月1日から平成18年8月31日、平成19年2月1日から平成19年2月15日		
組 織	調査研究部長 矢戸三男 中央調査事務所長 西川博孝 担当職員 主席研究員 関口達彦		
内 容	確認調査	上層272m ² /1,722m ²	下層58m ² /1,722m ² 本調査 上層0m ² 下層42m ²

整理作業

平成17年度

期 間	平成17年11月24日から平成17年11月30日、平成18年2月15日から平成18年2月28日		
組 織	調査部長 矢戸三男		

中央調査事務所長 谷 旬 担当職員 主席研究員 土屋治雄 上席研究員 鈴木弘幸
内 容 水洗・注記から実測まで

平成18年度

期 間 平成18年9月1日から平成18年9月30日、平成18年12月1日から平成18年12月28日、
平成19年2月15日から平成19年2月28日

組 織 調査研究部長 矢戸三男
中央調査事務所長 西川博孝 担当職員 主席研究員 関口達彦
内 容 水洗・注記から報告書刊行

2 調査の方法と経過

発掘調査に先行して、公共座標(第IX系)を基準に、調査対象範囲全城に50m×50mの方眼網を設定し基準測量を行った。この方眼網については、南側に隣接する独立行政法人都市再生機構の土地区画整理事業に伴う潤井戸地区埋蔵文化財調査で設定したグリッドに合わせ、呼称もそれに準じている。一辺50mの方眼を大グリッドとし、北西に起点を置いて、東西のY軸は西から順にA, B, ……、南北のX軸は北から順に1, 2, …と付した。この大グリッドを5m×5mの小グリッド100区画に分割し、北西隅を起点に00,01と順に付し南東隅を99とした。従って小グリッドの呼称は、例えばM5-55などとなる(第2図)。

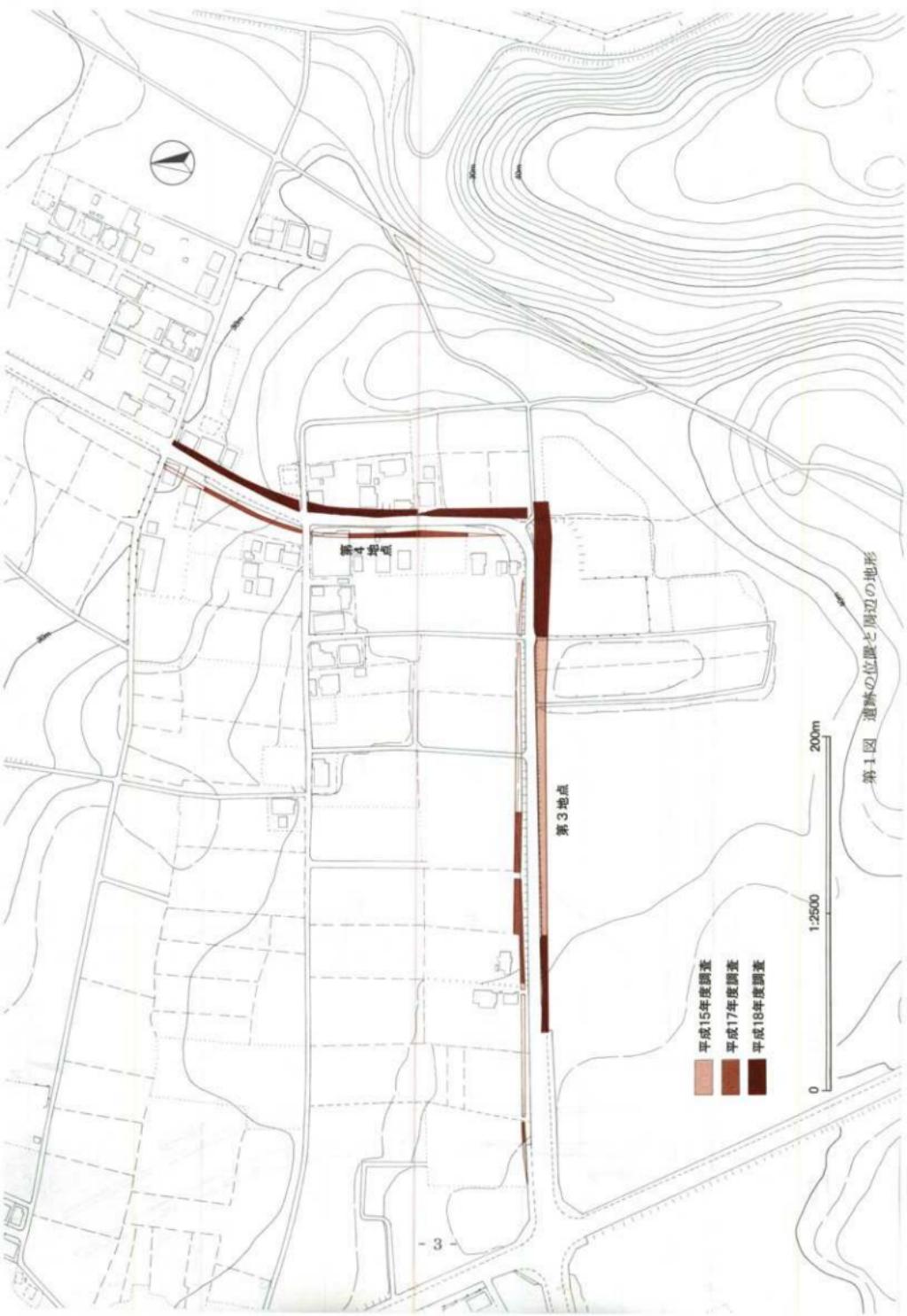
なお、発掘調査は複数年度にわたり、調査地点も煩雑に入り組んでいる。そのため、すでに報告書が刊行されている平成13・14年度の調査区の呼称¹¹を継承し、今回の調査区の東西に走る直線的な範囲を第3地点、大きなカーブから北東に延びる範囲を第4地点として報告する(第1・2図)。

平成15年度は、第3地点中央部の道路南側に面する2,430m²を対象に、平成15年12月1日から同年12月17日まで確認調査を行った。上層の確認調査は、調査対象面積の10%について幅2mの確認トレンチを設定し、重機による表土除去を行った後、遺構・遺物の検出状況を確認した。その結果、調査区西側で縄文時代の陥穴1基を検出したが、土器片などの遺物の出土は全くなかった。下層の確認調査は、上層調査区の約4%について2m×2mのグリッドを設定し、立川ローム層下部まで人力で掘削し石器等の有無を確認した。その結果、Ⅲ層下部～Ⅳ層から3点の石器が出土したため、周辺を拡張して石器の広がりを明らかにし、本調査の範囲を確定した。本調査は120m²を対象に、引き続き平成16年1月20日まで行った。小規模な2か所のブロックを検出し、削器・搔器・石核・剥片等が出土した。

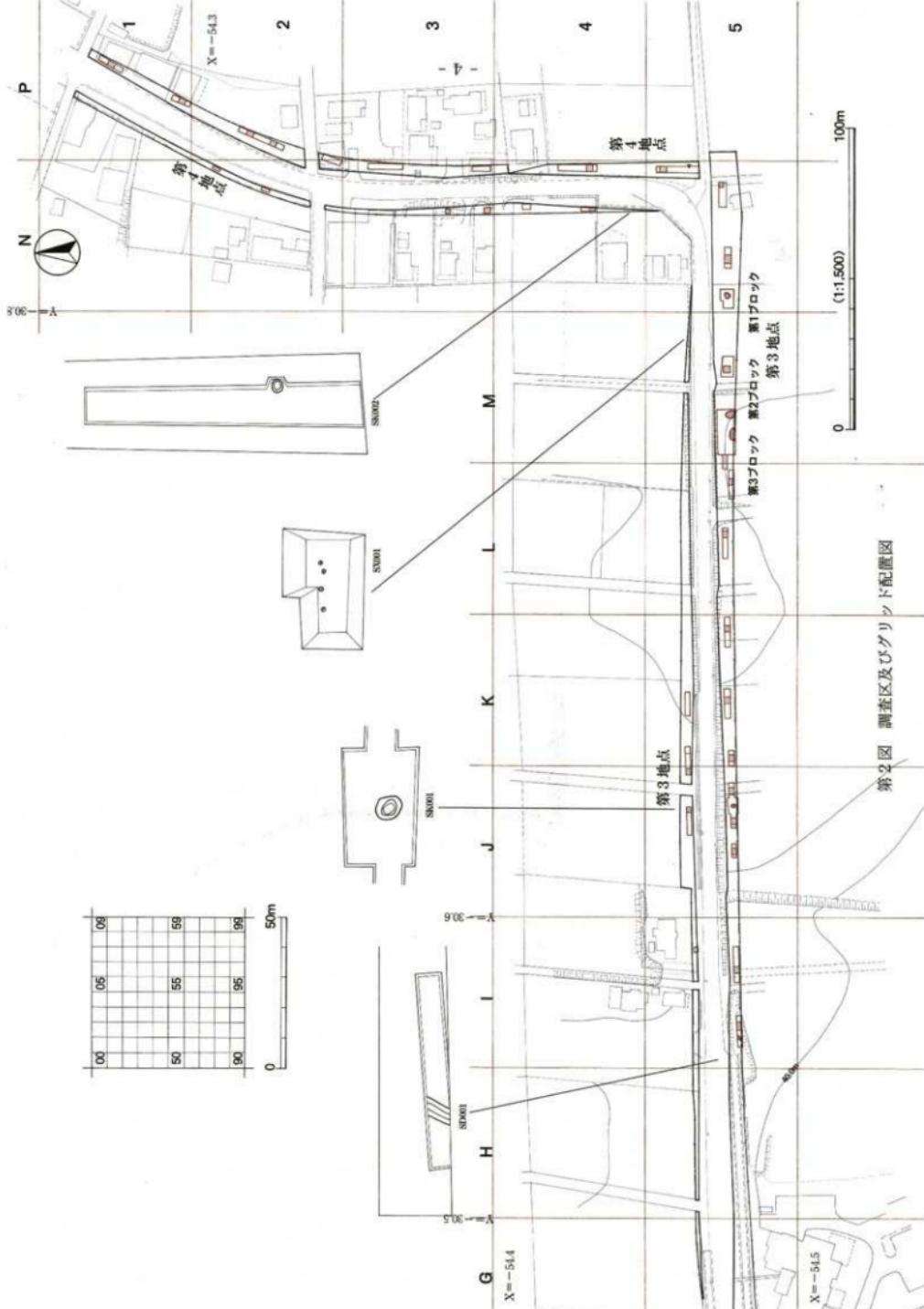
平成17年度は、第3地点西側と中央部の3か所、第4地点の道路西側の3か所について計560m²を対象に、平成18年1月17日から同年1月31日まで調査を行った。確認調査は平成15年度と同様の方法で実施したが、縄文土器が第4地点で出土したほかは、遺構・遺物は検出されなかった。

平成18年度は第1次調査を、第3地点では平成15年度調査地点の東西両側、第4地点の道路東側と西側の1か所について計1,315m²を対象に、平成18年8月1日から同年8月31日まで確認調査及び本調査を行った。上層では第3地点でピット列2条・溝状遺構1条、第4地点では土坑1基を検出した。下層の確認調査では、第3地点の東側においてⅢ層下部～Ⅵ層から5点の石器が出土したため、周辺を拡張して石器の広がりを明らかにし、本調査範囲を確定した。本調査は42m²を対象に8月31日まで行い、Ⅲ層下部～Ⅳa層にかけて1か所のブロック(中心はV層下部～VI層)を検出し、搔器・楔形石器や剥片等が出土した。さらに、第2次調査を第3地点の東端407m²について、平成19年2月1日から同年2月15日まで行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

第1図 遺跡の位置と周辺の地形



第2図 調査区及びグリッド配置図



第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置

中潤ヶ広遺跡は、市原市潤井戸字八方見塚1773ほかに所在する。

本遺跡は市原市の北部、千葉市と市原市の境を流れ東京湾に流入する村田川の下流域左岸の台地上に位置している。台地の西側はその支流である神崎川によって開析され、村田川に向かって南北に張り出すようなくぼみが形成されている。台地は東西約1.5km・南北2.5kmの広さをもち、北側では標高40m前後を測るが、村田川に接する北側に進むに従い標高は次第に低くなり、低位段丘面となる北端では13mほどである。この台地の中央部に浅い谷津(清水谷)が南北に侵入し、台地を東西に分けている。

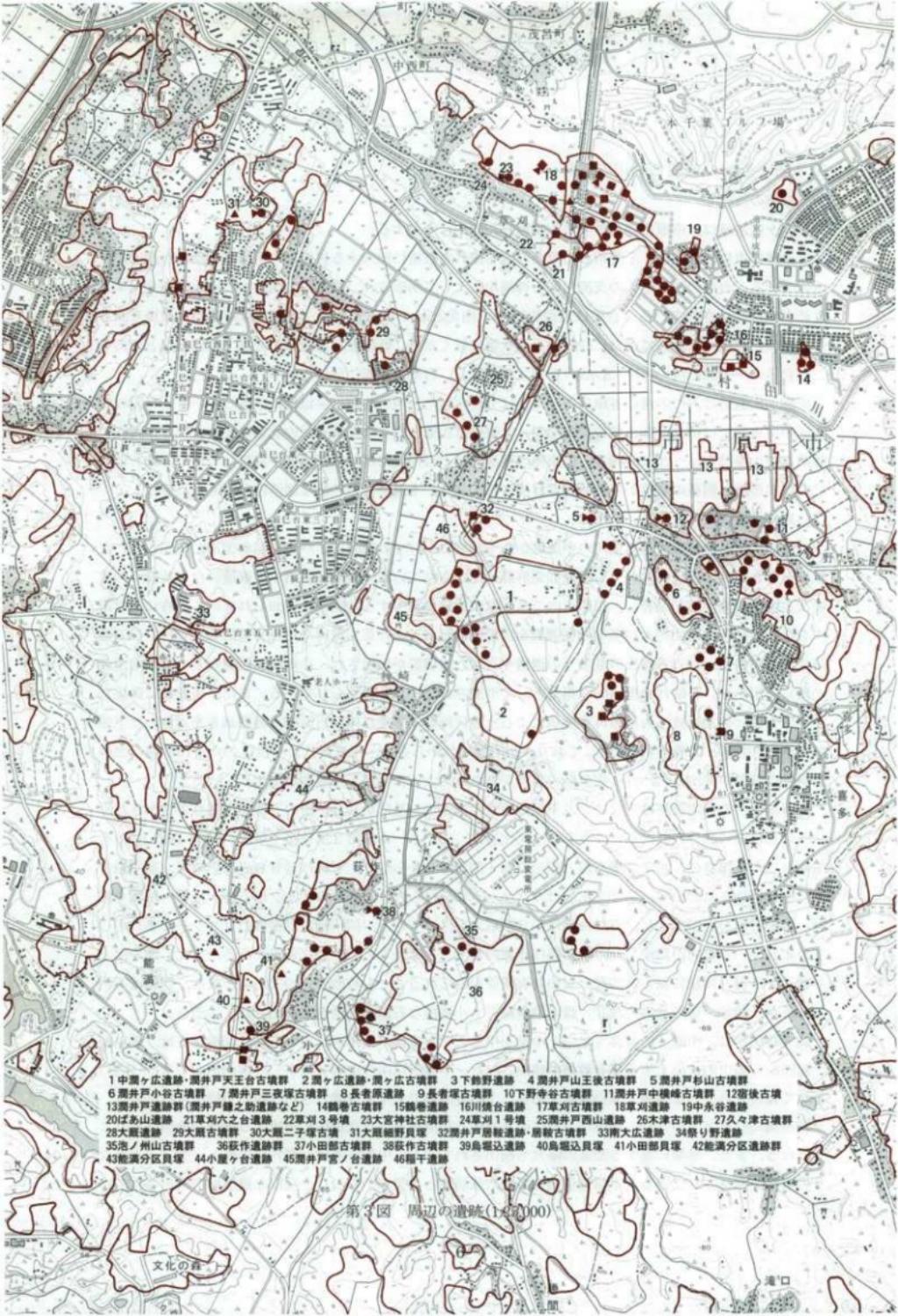
中潤ヶ広遺跡は、この浅い谷津により東西に分けられた台地の西側の平坦地に位置している。今回の調査区の中央部では標高は38m前後であるが、北東側は次第に低くなり調査区の北端は30mとなる。東側の谷津との比高は12m~20mを測る。南東側の標高50mの台地上には下鈴野遺跡が隣接している。旧石器時代では本遺跡と同様の層位から石器群が検出されており、本遺跡との密接な関連性が考えられる。

2 周辺の遺跡（第3図）

中潤ヶ広遺跡が位置する村田川の中流域から下流域にかけての範囲は、一帯を菊麻国造が支配していた地域と考えられ、古代においても市原郡菊麻郷に比定されている。親皇塚古墳や大厩遺跡など数多くの重要な古墳群や集落跡が分布し、市原市内でも有数の遺跡が集中する地域として知られている。特に、村田川右岸に広がり当財団が大規模な発掘調査を広範囲に行って來た草刈遺跡や川焼台遺跡などでは、旧石器時代から中世にいたる各時代の数多くの遺構や貝塚、古墳群が検出され、小銅鐸・銅鏡などの貴重な遺物が豊富に出土し、各時代の拠点的な集落として形成されていたと考えられている。また、当遺跡に隣接した区域では、独立行政法人都市再生機構による土地区画整理事業に伴い当財団が発掘調査を実施した下鈴野遺跡²¹や中潤ヶ広遺跡²²が位置しており、旧石器時代から奈良・平安時代、中世にいたる住居跡などの遺構や古墳群が検出され、鏃に銀象嵌の装飾が施された大刀など多くの遺物が出土している。

旧石器時代の周辺遺跡は少ないが、下鈴野遺跡では台地の基部から6か所の石器集中地点が検出され、2つの文化層に区分された。このうち第1文化層は、立川ローム層第2黒色帶上部(Ⅶ層~Ⅸ層上部)を中心とした石器群で、ナイフ形石器・楔形石器・削器などからなり、石材は珪質頁岩や黒曜石、凝灰岩などで主に構成されている。第2文化層は4ブロックに分けられ、Ⅲ層からナイフ形石器・搔器・削器・彫器・楔形石器などが出土し、石材は瑪瑙が6割以上を占めている。同一母岩が複数のブロックにまたがって分布している傾向が認められ、石器製作作業のあり方を考える上で重要な資料である。また、礫の出土も多く、石器と同様に双方向的な母岩の共有関係がみられることが特徴の一つである。また、詳細は不明であるが、潤井戸居鞍遺跡や潤井戸鎌之助遺跡でも小規模な石器集中地点が検出されている⁴¹。

縄文時代では、中潤ヶ広遺跡で早期と中期を中心とした遺構が検出されている。早期前葉では、礫が狭い範囲から集中的に出土する集石遺構が検出された。千葉市以南の地域で数多くの検出例があり、「礫群」として報告されている事例が多い遺構である。下鈴野遺跡でも早期後葉とされる礫群が検出されている。早期後葉になると、炉穴や住居跡の可能性のある竪穴状遺構といった居住に関連する遺構が検出されるようになる。また、早期に属する32基の陥穴も検出されている。中期後半は、竪穴住居跡・小竪穴・土坑などの遺構が発見されている。下鈴野遺跡でも竪穴住居跡と小竪穴からなる小規模な遺構群が検出されてい



るが、やや散漫な分布となっている。(財)市原市文化財センターが調査を行った下鈴野遺跡⁵¹では、中期後半の住居跡はわずかに3軒の検出である。潤井戸天王台遺跡⁶¹などでも土坑の検出は僅少で、当遺跡周辺の台地上での縄文時代の遺構は、いずれも散漫な分布を示している。一方、当遺跡の北東、村田川沿岸の低位段丘面上に位置している潤井戸鎌之助遺跡⁷¹や潤井戸中横峰遺跡⁴¹では、中期～後期の竪穴住居跡・小竪穴・土坑・埋甕・墓坑などがまとまって検出されている。地点貝塚や貝・獸骨を伴う土坑なども存在し、台地上と比較して微高地での当時の活発な活動の状況を知ることができる。

弥生時代になると、村田川流域では中期後半頃から沖積地の水田開発の拠点となる台地縁辺部や低位段丘面への集落の形成が認められ、なかには潤井戸西山遺跡⁵¹のような環濠集落も現れる。周辺の大既遺跡や大既浅間様古墳下層遺跡でも同様の環濠がみられることから、それぞれ近接して環濠集落が形成されている⁹¹。中流域の潤井戸鎌之助遺跡・潤井戸中横峰遺跡でも、中期後半から後期にかけての集落が営まれている。環濠は検出されていないが、方形周溝墓や木棺墓・土坑墓が造営されており、低位段丘面での拠点的な集落へ発展していく。このような村田川流域での活発な活動に対して、当遺跡周辺の台地上でも中潤ヶ広遺跡を中心に中期から後期の集落が形成されている。沖積地に比べると谷津奥部に位置しているが、中潤ヶ広遺跡では中期の竪穴住居跡を主体に方形周溝墓・土器棺墓・土坑などで構成され、古墳時代前期～中期へと継続して集落が営まれている。集落は、神崎川に開析された谷津を望む台地縁辺部に展開しており、沖積地から谷津奥部まで開発は拡大していく。

古墳時代の村田川左岸は、大きく下流域と中流域の2つに地域に古墳群の分布が分けられる。下流域は、4世紀後半で築造されたと考えられる親皇塚古墳や大既浅間様古墳を中心に形成されている菊間・大既地区の古墳群である。沖積平野を望む台地の先端部に展開し、弥生時代中期の環濠集落から継続して集落が営まれ、大型の前方後円墳が集中している地域である。中流域は、小谷1号墳、潤井戸杉山古墳、山王後1号墳、宿後古墳(全長35m)、下野寺谷1号墳(全長43.9m)などの前方後円墳を中心とする古墳群が展開している潤井戸地区である。このうち小谷1号墳は全長41mを測り、墳丘には下總型円筒埴輪列が巡っている。出土した須恵器大甕から6世紀末葉の時期が想定されている¹⁰。本遺跡の北東側には、これを主墳として円墳10基を伴う潤井戸小谷古墳群が形成されている。潤井戸杉山古墳は、墳丘主軸長56.5mを測り盾形周溝をもつ、埴輪が巡らされていない最終末段階の前方後円墳の可能性が強いと考えられている¹¹。山王後1号墳は本遺跡の東側に隣接する全長42mの前方後円墳である。2基の木棺直葬の埋葬施設をもち、築造の時期は出土遺物から6世紀末～7世紀前半頃の時期が想定されている¹²。近接する山王後2号墳も前方後円墳で、この2基を中心的に周辺には径13m～20mの円墳が点在し、潤井戸山王後古墳群を形成している。このように潤井戸地区周辺には、菊間・大既地区よりは比較的新しい時期の古墳群が展開している。この両地区の中間に、弥生時代の環濠集落でもあり、古墳時代中期の豪族居館跡の可能性がある潤井戸西山遺跡が位置している。四脚門と構列で区画された範囲に掘立柱建物や鍛冶工房が配置されており、右岸の草刈遺跡とともに村田川中流域では中心となる遺跡として注目される。また、本遺跡の西側に位置する潤井戸天王台古墳群の一部が、(財)市原市文化財センターにより調査されている¹³。神崎川を望む台地縁辺部に展開し、当財団が中潤ヶ広遺跡として調査した古墳を含めると総数40基以上にもなる大規模な古墳群であることが明らかとなってきた。前期の方墳や円墳も存在し、神崎川の中流域には出現期の古墳の一つである小田部古墳(円墳：径23m)が位置していることから、この流域には前期古墳が点在している様相がわかる。潤井戸天王台古墳群の中心は、6世紀代の前方後円墳と円墳である。このうち、29号墳(円

墳：径20m）からは乳文鏡や勾玉のほか、木棺直葬の埋葬施設から直刀・管玉・耳環などが出土している。当財団が調査した023号墳（円墳：径20m）は横穴式石室と土坑2基を埋葬施設にもち、横穴式石室には銅の外縁部に銀象嵌が装飾された直刀や鐵鎌・馬具（轡）などが副葬されていた。概ね6世紀中頃から後半代の時期と考えられている。E001号墳（前方後円墳：墳丘長30m）と2基の円墳は、潤井戸天王台古墳群から南側に離れた台地上に分布し、本来は潤ヶ広古墳群に属する古墳群である。E001号墳は横穴式石室と木棺直葬の3基の埋葬施設をもち、このうち木棺直葬の埋葬施設からは直刀や玉類が出土している。築造時期は、出土した須恵器から6世紀後半～末頃とされている。

奈良・平安時代の遺跡は少なく、古墳時代終末期の方墳の系譜を引く方形墳墓が中潤ヶ広遺跡や下鈴野遺跡で検出されている。周溝の中央に地下式の墓坑を設けて、これを埋葬施設としている。周溝をもたずに単独で分布している墓坑もある。内部から人骨や骨蔵器に使用された土師器甕が出土している墓坑もあり、埋葬様式の変遷を知る上で重要な資料である。周辺の台地上における奈良・平安時代以降の集落遺跡の調査例は少なく、多くは墓域として機能していたと考えられる。

- 注1 伊藤智樹 2005 『市原市中潤ヶ広遺跡(1)』 (財)千葉県文化財センター
- 2 土屋治雄・猪俣昭喜・島立 桂 2003 『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書I－市原市下鈴野遺跡－』 (財)千葉県文化財センター
- 3 鶴岡 健・大内千年・城田義友 2006 『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書II－市原市中潤ヶ広遺跡(上層)－』 (財)千葉県教育振興財團
- 4 (財)市原市文化財センター 2006 『市原市文化財センター年報－平成17年度 24年の歩み－』
- 5 大村直 1987 『下鈴野遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 6 木對和紀 1988 『中潤ヶ広遺跡・天王台遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 7 田所 真 1999 『潤井戸鎌之助遺跡』『第14回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』 (財)市原市文化財センター
- 8 鈴木英啓 1986 『潤井戸西山遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 半田堅三 1990 『草刈尾梨遺跡』 (財)市原市文化財センター
- 木對和紀 2004 『潤井戸西山(草刈尾梨)遺跡』『平成15年度市原市内遺跡発掘調査』市原市教育委員会
- 高橋康男 2004 『市原市潤井戸西山遺跡C地点』 (財)市原市文化財センター
- 小川浩一 2005 『市原市潤井戸西山遺跡D地点』 (財)市原市文化財センター
- 9 大村 直 2005 『市原市の環濠集落』『第20回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』 (財)市原市文化財センター
- 10 高橋康男 1992 『市原市小谷1号墳』 (財)市原市文化財センター
- 11 萩原恭一 2002 市原市潤井戸杉山古墳測量調査報告』『千葉県史研究』第10号 千葉県
- 12 相京建史ほか 1982 『祭り野遺跡・山王後1号墳』 祭り野遺跡・山王後古墳発掘調査団
- 13 鶴岡英一 1998 『潤井戸天王台古墳群』『第13回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』 (財)市原市文化財センター

第2章 旧石器時代

第1節 調査の概要

中瀬ヶ広遺跡では、第1章で述べたように平成15年度・18年度の発掘調査で旧石器時代の遺物が出土している。いずれも第3地点とした直線的な調査区の東端で、清水谷と呼ばれる浅い谷津を望む台地縁辺部から平坦面に位置している(第2図)。同時期の遺跡である下鈴野遺跡は南東の台地上に隣接する。

遺物の出土層準から、平成15年度の調査で検出した集中地点を第2・第3ブロック、平成18年度の集中地点を第1ブロックとする。第1ブロックは、第2・第3ブロックの東側40mに分布し、V層下部～VI層が中心である。III層やIXa層からも砂岩や安山岩の剥片が出土しているが、それぞれ単独の文化層とは判断できない。計26点の遺物が出土しており、内訳は搔器1点・楔形石器1点・剥片19点・碎片5点である。石器石材には砂岩が主に利用され、安山岩、凝灰岩、チャート、黒曜石である。第2・第3ブロックの出土層準はIII層下部～IV層の層位で、同一の文化層に属していると考えられる。両ブロックは4mの間隔で分布しており、計13点の遺物が出土した。内訳は搔器1点・削器1点・石核3点・剥片7点・碎片1点である。石器石材は黒曜石を主体に、安山岩がわずかに利用されている。

第2節 基本土層(第4図)

本遺跡の立川ローム層の堆積状況は、下総台地で広く観察されている基本土層とほぼ共通する。各層の概略は以下のとおりである。なお、I層からII層の説明は省略する。

III層：黄褐色の軟質ローム層で、厚さは20cm～35cmである。

IV～V層：黄褐色の硬質ローム層で、大半は立川ローム層第1黑色帯に相当すると考えられるが、上部はIII層に取り込まれている。本遺跡では全体に赤色のスコリアを含み、IV層とV層の明確な区分はできなかった。厚さは10cm～25cmである。

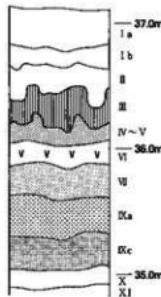
VI層：明黄褐色の硬質ローム層で、黒色土粒とAT(姶良丹沢火山灰)がまとまって包含されている。部分的にATがブロック状に包含されている箇所もある。厚さは15cmである。

VII層：褐色の硬質ローム層で、立川ローム層第2黑色帯の上部に相当する。ATが拡散して包含されている。赤色のスコリアを若干含み、厚さは15cm～20cmである。

IXa層：暗褐色の硬質ローム層で、立川ローム層第2黑色帯の下部の上半である。赤色、暗緑色のスコリアを含み、厚さ15cm～20cmである。なお、本遺跡ではIXb層を明確に識別することはできなかった。

IXc層：暗褐色の硬質ローム層で、立川ローム層第2黑色帯の下部の下半である。IXa層に比較して、赤色、暗緑色のスコリアを多く含む。厚さは25cm～30cmである。

X層：褐色のローム層で、やや軟質である。立川ローム層の最下層である。当財団の基本層序区分では、色調やスコリアの包含等でXa層とXb層の細分を行っているが、本遺跡では明確な識別はできな



第4図 基本土層図

かった。スコリアの包含は全体に少なく、厚さは30cmである。

XI層：灰褐色軟質ローム層で、粘性が強い。武藏野ローム最上層である。

第3節 石器群の分布と出土遺物

1. 第1ブロック（第5図、図版3）

1) 概要

調査区東側の台地縁辺部に位置する。調査地点はすでに表土が深く削平され、その中に残土が盛土されていた。この残土を除去したところ、II層下部からIII層上部が搅乱を受けていない状態で現れた。表土からは、深さ3mの位置で石器が出土したため、途中に段を設けて調査を行った。その結果、26点の遺物がN5-51グリッドを中心として、2.2m×2.7mの範囲からまとまって出土した。出土層準はV層下部～VI層を中心であるが、III層やIXa層からも剥片が出土している。石器組成は、搔器1点・楔形石器1点・剥片19点・碎片5点である。石材組成は、安山岩6点・黒曜石1点・凝灰岩1点・チャート1点・砂岩17点である。

2) 母岩別資料

- ・安山岩1 淡茶灰色の黒色緻密質安山岩である。微細な斑晶が剥離面にみられる。楔形石器1点・剥片1点を含み、総重量は5.03gである。
- ・安山岩2 淡灰色の黒色緻密質安山岩である。黄白色や黒色の微細な斑晶が入る。剥片1点・碎片1点を含み、総重量は1.34gである。
- ・安山岩3 淡灰色の黒色緻密質安山岩である。斑晶は認められない。剥片1点を含み、総重量は1.00gである。
- ・安山岩4 濃灰色の黒色緻密質安山岩である。黄白色や黒色の微細な斑晶が疎らに入る。剥片1点を含み、総重量は0.65gである。
- ・黒曜石1 無色透明な部分に不透明黒色の部分が縞状に入る。碎片1点を含み、総重量は0.17gである。
- ・凝灰岩1 明灰緑色を呈する凝灰岩である。わずかに残る原礫面は、風化して灰褐色を呈している。珪化度は低い。搔器1点を含み、総重量は7.26gである。
- ・チャート1 剥離面が茶褐色を呈し、珪化度は高い。剥片1点を含み、総重量は1.13gである。
- ・砂岩1 原礫面は風化して茶褐色を呈し、剥離面は青黒色・透明・淡黄白色の微細な粒子からなる。ガジリ面は青黒色を呈する。剥片13点・碎片3点を含み、総重量は53.33gである。
- ・砂岩2 青黒色と透明な微細な粒子からなる。剥片1点を含み、総重量は2.88gである。

3) 出土遺物（第7図、第1・3表、図版5）

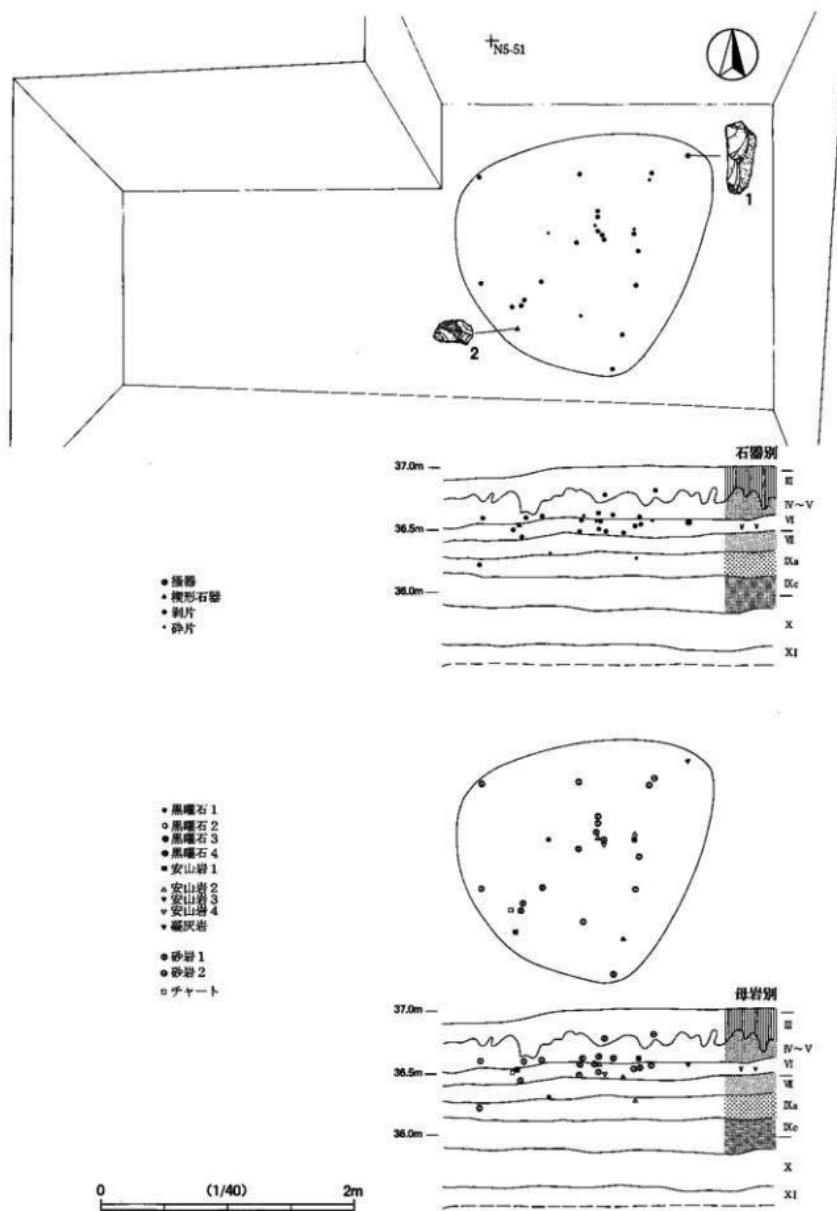
搔器1点・楔形石器1点・剥片19点・碎片1点が出土している。

搔器(1)は凝灰岩1製で、横長剥片の末端に急角度の加工を行っている。

2は安山岩1製の小型の楔形石器である。幅広の剥片を素材として、右側縁に桶状の剥離面がみえる。

3は安山岩1製の剥片である。原礫面を大きく残している。桶状の剥離面が中央にみえる。

4・5は砂岩1製の剥片で、原礫面が大きく残る。他の剥片や碎片も含めて、接合はしないが同一の母岩であろう。4は接合資料で、原礫面で接合している。



第5図 第1ブロック遺物分布図

2. 第2ブロック（第6図、図版3）

1) 概要

調査区東側の台地平坦面で、第3ブロックの東4mに位置する。5点の遺物が2.0m×3.5mの範囲に散漫に分布している。出土層準はⅢ層下部～IV層で、石器組成は搔器1点・剥片3点・碎片1点である。石材組成は、黒曜石3点・安山岩2点である。

2) 母岩別資料

- ・黒曜石1 不透明な黒色で、灰色の粒頸が入る。剥片1点を含み、総重量は1.42gである。
- ・黒曜石2 不透明な黒色に近い灰色で、微細な粒頸が入る。剥片1点を含み、総重量は1.66gである。
- ・黒曜石3 不透明な黒色で、黄白色の微細な粒頸が入る。搔器1点を含み、総重量は7.05gである。
- ・安山岩2 淡茶褐色の黒色緻密質安山岩である。碎片1点を含み、総重量は0.37gである。
- ・安山岩3 淡茶灰色の黒色緻密質安山岩である。原礫面に微細な窪みが無数にみられる。剥離面には黄白色や黒色の斑晶が疎らに入る。剥片1点を含み、総重量は36.97gである。

3) 出土遺物（第7図、第2・4表、図版5）

搔器1点・剥片3点・碎片1点が出土している。

搔器(6)は黒曜石3製で、厚手の不定形な剥片を素材とする。左端部に刃部を作出している。

3. 第3ブロック（第6図、図版3）

1) 概要

調査区東側の台地平坦面に位置する。8点の遺物がM5-61グリッドを中心に、2.3m×3.5mの範囲から出土している。隣接する第2ブロックとの接合関係はない。出土層準はⅢ層下部～IV層で、石器組成は削器1点・石核3点・剥片4点である。石材組成は、黒曜石7点・安山岩1点である。

2) 母岩別資料

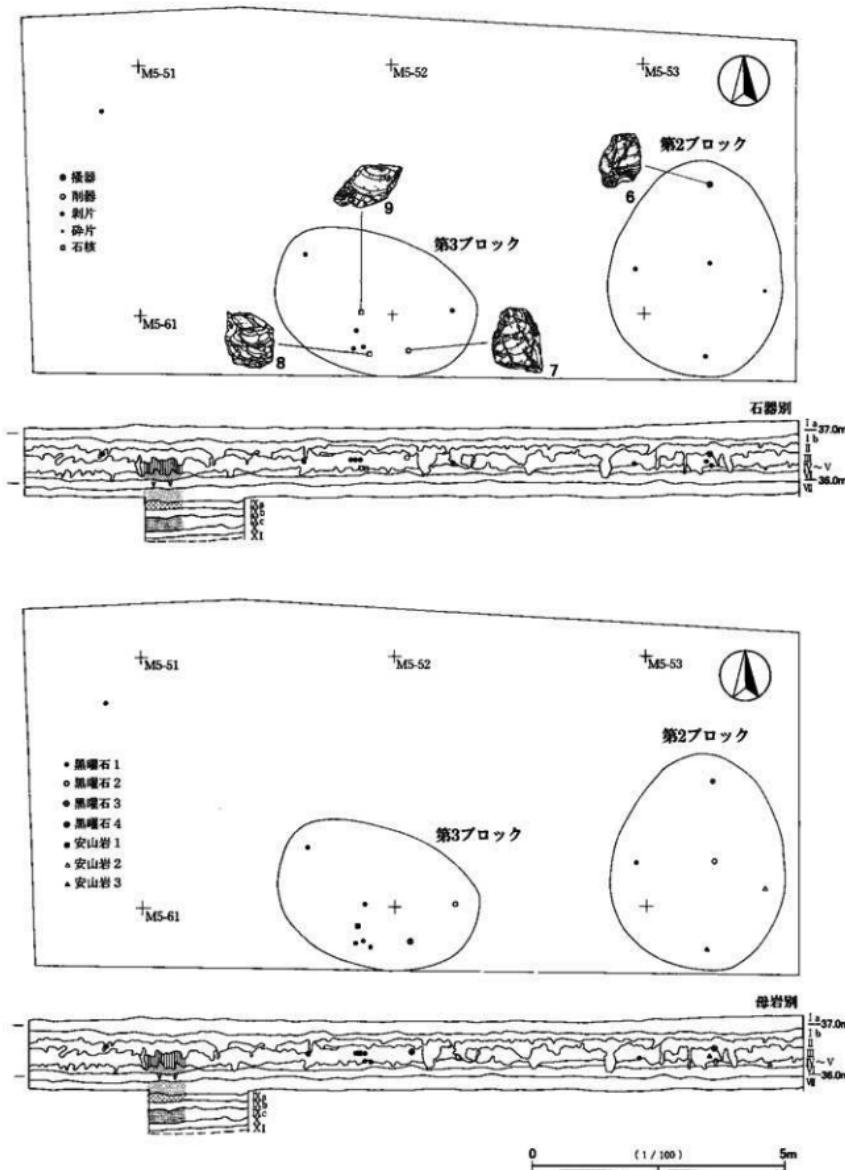
- ・黒曜石1 不透明な黒色で、黄白色の粒頸が無数に入る。石核3点・剥片2点を含み、総重量は47.14gである。
- ・黒曜石2 不透明な黒色に近い灰色で、微細な粒頸が入る。剥片1点を含み、総重量は1.71gである。
- ・黒曜石4 不透明な黒色で、灰色の微細な粒頸が入る。削器1点を含み、総重量は10.57gである。
- ・安山岩1 淡茶灰色の黒色緻密質安山岩である。剥片1点を含み、総重量は3.38gである。

3) 出土遺物（第7図、第2・4表、図版5）

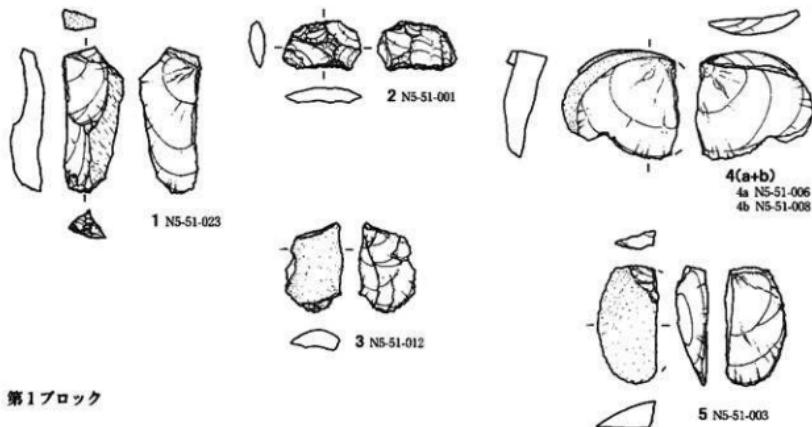
削器1点・石核3点・剥片4点が出土している。

削器(7)は黒曜石4製で、厚手の剥片を素材とする。左側縁に急斜度の加工により、鋸歯状の刃部を作出している。

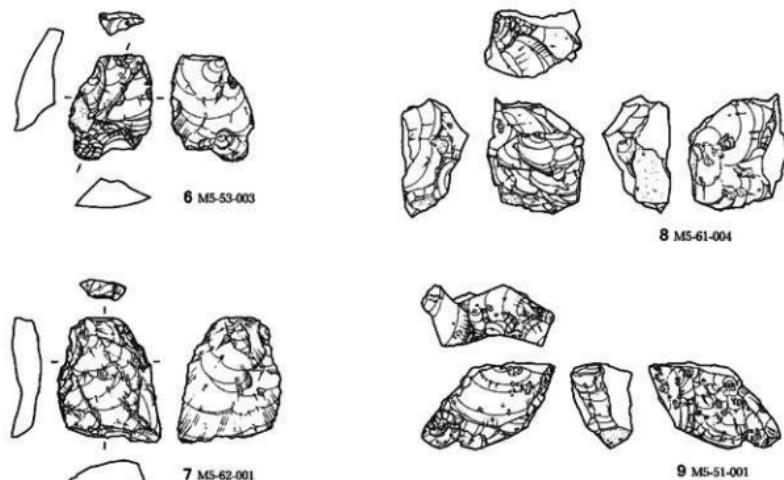
黒曜石1製の石核(8・9)は3点出土しているが、うち2点は接合する。打点を移動しながら、分割礫から一般剥片を生産している。剥片も出土しており、簡易な剥離作業を行っていたと考えられる。



第6図 第2・第3ブロック遺物分布図



第1ブロック



第2・第3ブロック

0 (2/3) 10cm

第7図 第1～第3ブロック出土石器

第1表 第1ブロック出土石器組成表

母岩名/器種	掻器	楔形 石器	剥片	碎片	点数	点数比	重量(g)	重量比
安山岩 1		1	1		2	7.69%	5.03	6.91%
安山岩 2			1	1	2	7.69%	1.34	1.84%
安山岩 3			1		1	3.85%	1.00	1.37%
安山岩 4			1		1	3.85%	0.65	0.89%
黒曜石 1				1	1	3.85%	0.17	0.23%
凝灰岩 1	1				1	3.85%	7.26	9.97%
チャート 1				1	1	3.85%	1.13	1.55%
砂 岩 1			13	3	16	61.54%	53.33	73.27%
砂 岩 2			1		1	3.85%	2.88	3.96%
合 計		1	1	19	5	100.00%	72.79	100.00%

第2表 第2・第3ブロック出土石器組成表

第2ブロック

母岩名/器種	掻器	剥片	碎片	点数	点数比	重量(g)	重量比	
黒曜石 1		1		1	20.00%	1.42	2.99%	
黒曜石 2		1		1	20.00%	1.66	3.50%	
黒曜石 3	1			1	20.00%	7.05	14.85%	
安山岩 2			1	1	20.00%	0.37	0.78%	
安山岩 3		1		1	20.00%	36.97	77.88%	
合 計		1	3	1	5	100.00%	47.47	100.00%

第3ブロック

母岩名/器種	削器	石核	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比	
黒曜石 1		3	2	5	62.50%	47.14	75.06%	
黒曜石 2			1	1	12.50%	1.71	2.72%	
黒曜石 4	1			1	12.50%	10.57	16.83%	
安山岩 1				1	12.50%	3.38	5.38%	
合 計		1	3	4	8	100.00%	62.80	100.00%

第3表 第1ブロック出土石器属性表

標因番号	遺物番号	器種名	母岩名	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	接合	備考
第7図1	N5-51-023	搔器	凝灰岩	1	43.5	18.3	11.5	7.26	
第7図2	N5-51-001	櫛形石器	安山岩	1	14.6	23.9	5.2	1.78	
第7図3	N5-51-012	剥片	安山岩	1	27.1	17.1	6.3	3.25	
第7図4a	N5-51-006	剥片	砂岩	1	32.5	35.1	14.2	15.85	008
第7図4b	N5-51-008	剥片	砂岩	1	26.7	5.0	3.8	0.60	006
第7図5	N5-51-003	剥片	砂岩	1	35.8	18.2	9.5	5.89	
	N5-51-017	剥片	安山岩	2	14.9	13.0	3.4	0.89	
	N5-51-021	碎片	安山岩	2	11.5	12.5	3.8	0.45	
	N5-51-009	剥片	安山岩	3	27.8	7.5	4.7	1.00	
	N5-51-018	剥片	安山岩	4	14.3	15.5	3.1	0.65	
	N5-51-019	碎片	黒曜石	1	15.3	6.6	2.2	0.17	
	N5-51-013	剥片	チャート	1	19.3	14.1	4.8	1.13	
	N5-50-001	剥片	砂岩	1	21.2	25.1	9.2	6.11	N5-51・10と接合し、1個体
	N5-50-002	剥片	砂岩	1	19.1	15.0	6.5	1.54	
	N5-51-002	剥片	砂岩	1	41.2	19.9	10.4	7.31	
	N5-51-004	剥片	砂岩	1	20.5	17.2	4.2	0.80	
	N5-51-005	剥片	砂岩	1	17.2	24.6	7.4	2.81	
	N5-51-007	碎片	砂岩	1	12.6	10.3	3.2	0.46	
	N5-51-010	剥片	砂岩	1	23.5	18.7	8.4	4.65	N5-50・01と接合し、1個体
	N5-51-011	剥片	砂岩	1	14.8	13.8	6.2	1.07	
	N5-51-014	剥片	砂岩	1	19.0	11.2	4.0	0.71	N5-51・20と接合し、1個体
	N5-51-015	碎片	砂岩	1	14.1	13.6	5.1	0.97	
	N5-51-016	剥片	砂岩	1	21.0	16.2	4.1	1.56	
	N5-51-020	剥片	砂岩	1	15.0	19.8	9.0	2.33	N5-51・14と接合し、1個体
	N5-51-024	碎片	砂岩	1	14.8	11.1	4.6	0.67	
	N5-51-022	剥片	砂岩	2	21.5	15.4	8.8	2.88	

第4表 第2・第3ブロック出土石器属性表

標因番号	遺物番号	器種名	母岩名	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	ブロック	備考
第7図6	M5-53-003	搔器	黒曜石	3	31.0	25.3	11.8	7.05	第2
第7図7	M5-62-001	削器	黒曜石	4	37.6	29.5	9.1	10.57	第3
第7図8	M5-61-004	石核	黒曜石	1	37.0	29.4	19.3	17.31	第3
第7図9	M5-51-001	石核	黒曜石	1	26.4	39.0	18.5	13.25	M5-61・3と接合し、1個体
	M5-51-002	剥片	黒曜石	1	27.5	44.6	14.2	12.79	第3
	M5-52-002	剥片	黒曜石	2	23.0	15.8	6.4	1.71	第3
	M5-61-001	剥片	安山岩	1	23.0	26.9	5.9	3.38	第3
	M5-61-002	剥片	黒曜石	1	16.6	23.5	9.7	2.81	第3
	M5-61-003	石核	黒曜石	1	11.8	13.4	10.4	0.98	M5-61・4と接合し、1個体
	M5-52-001	剥片	黒曜石	1	18.1	21.2	6.7	1.42	第2
	M5-53-001	剥片	黒曜石	2	14.7	27.0	5.5	1.66	第2
	M5-53-002	碎片	安山岩	2	16.3	9.4	2.7	0.37	第2
	M5-63-001	剥片	安山岩	3	45.5	49.0	17.5	36.97	第2
	M5-50-001	剥片	黒曜石	1	31.0	27.8	13.8	7.72	— ブロック外

第3章 縄文時代以降

第1節 検出された遺構

縄文時代以降の時期では、第3地点から陥穴や土坑・溝状遺構・ピット列が検出された(第2図)。陥穴(SK001)は出土遺物はないが、形態などから縄文時代早期の時期と判断した。そのほかの遺構は、時期を確定できる遺物が伴わないので判然としないが、概ね奈良・平安時代以降の時期であろう。

SK001 (第8図、図版4)

調査区中央の台地平坦面、J 5-67グリッドに位置する陥穴である。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は1.55m×1.30m、深さ2.20mである。中段をもち、部分的に壁面が抉られている。底面はほぼ平坦で、東京軽石層下の灰白色粘土層まで掘下げられれている。覆土は、ロームブロックやローム粒を多く含む褐色土や黄褐色土の堆積後に、ローム粒を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

SK002 (001土坑) (第8図、図版4)

調査区東側の台地縁辺部、N 5-29グリッドに位置する土坑である。平面形態は楕円形を呈し、規模は55cm×75cm、深さは65cmである。急角度に堀込まれ、底面は凹凸がある。出土遺物はない。

SD001 (002溝状遺構) (第8図)

調査区中央の台地平坦面、I 5-61・62グリッドに位置する溝状遺構である。周辺は硬化面が広がり、上面をすでに大きく削平されている。調査範囲内では南西-北東方向に走り、長さ1.4m・幅0.9mの部分を検出した。堀込みは緩やかで、深さは10cmである。覆土は、小ロームブロックを多く含む黒褐色土が堆積している。出土遺物はない。

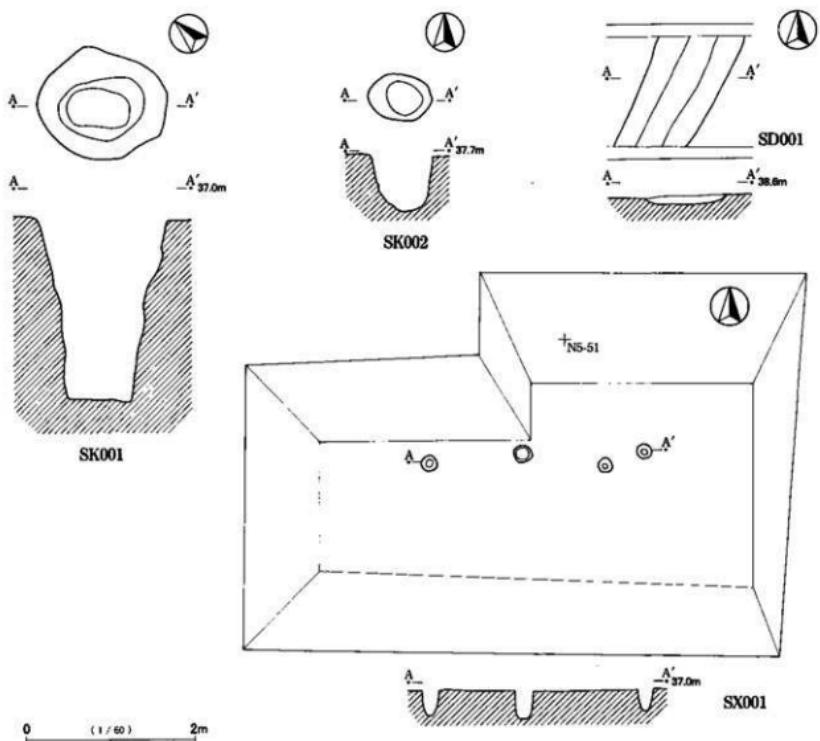
SX001 (001ピット列) (第8図、図版4)

調査区東側の台地縁辺部、N 5-50・51グリッドに位置するピット列である。狭長な調査範囲のため、周辺を十分に拡張できなかったので判然としないが、掘立柱建物になる可能性も考えられる。ピットは4基が検出されたが、主な3基は東西方向に1.1m~1.5mの間隔で配列されている。ピットの大きさは、径20cm前後・深さ30cm前後である。出土遺物はない。

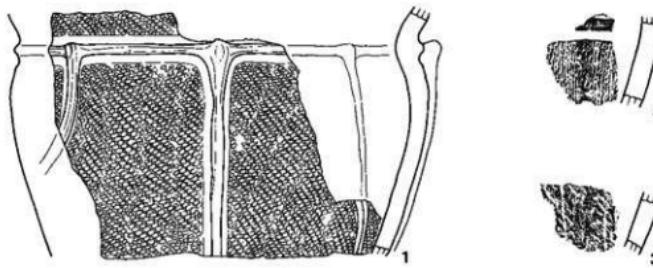
第2節 グリッド出土遺物

第4地点西側の調査区N 2グリッドから、図示した縄文時代中期の土器がまとまって出土した(第9図、図版5)。台地縁辺部の緩斜面上に位置しているが、周辺では同時期の遺構は検出されていない。

1は加曾利E II式土器である。口縁部と胴部を横位の隆帯で区画する。胴部に垂下する隆帯との交点は、瘤状に小さく突起している。胴部は隆帯で文様区画され、区画内をLR縄文で充填する。胴部の隆帯は、直線あるいは蛇行している。隆帯の左右は磨消されている。口縁部はLR縄文が施され、部分的ではあるが外側に開くような形態をとる。内面はナデで調整されている。2は撚糸を地文に、横位の沈線の上部の地文を磨消している。内面はナデで調整されている。3はLR縄文を施してから、ナデで器面を調整している。2・3とも加曾利E II式土器であろう。



第8図 検出遺構



第9図 出土遺物

0 (1/3) 10cm

第4章 まとめ

中潤ヶ広遺跡(2)の4次にわたる調査では、旧石器時代の遺構・遺物を中心に、縄文時代の陥穴・中期の土器や、奈良時代以降のピット列などが検出された。狭長な調査範囲のため各時代の様相の全容は把握できなかつたが、ここではまとめて遺物が出土した旧石器時代の調査成果を述べて、まとめとしたい。

旧石器時代は、立川ローム層V層下部～VI層を中心とした第1ブロックの石器群と、Ⅲ層下部～IV層を出土層準とする第2・第3ブロックの石器群の、2つの文化層に分けることができる。第1ブロックは、搔器・楔形石器などの石器が出土し、剥片類を含む石器素材としては、砂岩が最も多く点数比で65.4%を占めている。次の安山岩は23.1%であるが、黒曜石・凝灰岩・チャートは各々3.85%となっている。第2・第3ブロックは、搔器・削器などの石器が出土している。石核・剥片類を含む石器素材は黒曜石と安山岩からなっているが、このうち黒曜石が主体的で点数比では77%を占め、安山岩は剥片類がわずかに出土している程度である。いずれも小規模な石器の集中で、石器製作作業の特徴的な痕跡は残されていない。

周辺では、南東に隣接する下鈴野遺跡で台地の基部から6か所の石器集中地点が検出され、2つの文化層に区分された。このうち第1文化層は、立川ローム層第2黑色帯上半部(VII層～IX層上部)を中心とした石器群で、ナイフ形石器・楔形石器・削器などからなり、石器石材は珪質頁岩や黒曜石、凝灰岩などで主に構成されている。第2文化層は4ブロックに分けられ、Ⅲ層からナイフ形石器・搔器・削器・彫器・楔形石器などが出土し、石器石材は瑪瑙が6割以上を占めている。同一母岩が複数のブロックにまたがって分布している傾向が多く認められ、石器製作作業のあり方を考える上で重要な資料となっている。また、礫の出土も多く、石器と同様に双方向的な母岩の共有関係がみられることも特徴の一つである。本遺跡の第2・第3ブロックの石器群は、下鈴野遺跡における第2文化層の搔器などの石器群と出土層位はほぼ近似しているが、主要石器石材が本遺跡では黒曜石であるのに対して、下鈴野遺跡は主に瑪瑙で構成されており、使用石材に大きな違いをみせている。

今回は限定的な調査範囲であったが、立川ローム層A T(始良丹沢火山灰)より上部に位置する3ブロックが検出され、旧石器時代の2つの文化層に区分することができた。南東の台地上に展開する下鈴野遺跡の大規模な石器群と比較すれば小規模な石器の集中であるが、このような小ブロックが台地縁辺部から平坦部に点在する様相を明らかにできたことは、今回の成果の一つといえよう。

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真



第3地点（平成15年度調査）



第3地点（平成15年度調査）



第3地点（平成17年度調査）



第4地点（平成17年度調査）



第3地点（平成18年度第1次調査）



第3地点（平成18年度第1次調査）



第3地点（平成18年度第2次調査）



第3地点（平成18年度第2次調査）



基本土層



第2・第3ブロック

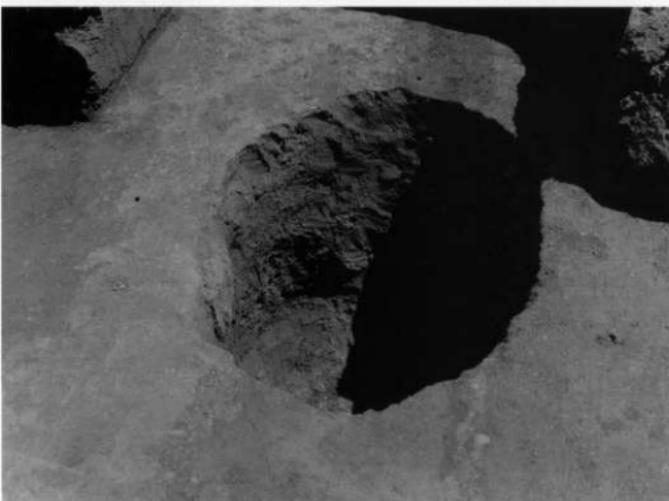


第1ブロック

図版4



SK001



SK002



SX001



旧石器



縄文土器

報告書抄録

ふりがな	いちはらしなかうるがひろいせき
書名	市原市中潤ヶ広遺跡(2)
副書名	主要地方道五井本納線住宅市街地基盤整備委託(潤井戸工区)埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第579集
編著者名	関口達彦
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL. 043-424-4848
発行年月日	西暦2007年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中潤ヶ広遺跡(2)	千葉県市原市潤井戸字八方見塚 1773 ほか	219	081	35 度 30 分 30 秒	140 度 10 分 23 秒	20031201 ~ 20040120	2,430m ²	道路建設
						20060117 ~ 20060131	560m ²	
						20060801 ~ 20060831	1,315m ²	
						20070201 ~ 20070215	407m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中潤ヶ広遺跡(2)	包蔵地	旧石器時代	3ブロック	搔器、楔形石器、剝器、石核、剥片	立川ローム層Ⅴ層下部～VI層の層位から、旧石器時代の搔器、楔形石器などが出土した。出土層位や石材などから、大きくは2つの文化層の石器群と考えられる。
		縄文時代	陥穴1基	縄文土器	
		奈良時代以降	土坑1基、溝状遺構1条、ピット列1条		

千葉県教育振興財団調査報告第 579 集

市原市中潤ヶ広遺跡(2)

—主要地方道五井本納線住宅市街地基盤整備委託(潤井戸工区)埋蔵文化財調査報告書—

平成 19 年 3 月 23 日発行

編集 財團法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発行 千葉県県土整備部
千葉県千葉市中央区市場町 1-1

財團法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡 809 番地の 2

印刷 三陽工業株式会社
千葉県市原市五井 5510-1
